

目を凝らして見るとどこで買ったか推測できない謎の置物がすらっと壁に沿って置いてありほんのりと自己主張していた。

祖父は奥の方にある押入れを開け、何か探している。手を動かすたびに埃が宙を舞う。何年間も開けてないことが推測できる。

蒼は置物一つ一つを軽く突いたり手にとって見たりしながら祖父を待った。

「よくこんなガラクタ集めたね。これなんかいる？」

縄文土器のようだが色使いが現代チック、全体的に曲線が強調されている置物をつまみながら苦笑してる。

「それは昔、どこだっけな？ 忘れたが何かの厄除けの効果があるらしい」

ふうんと緒岸は興味なさそうにそれを置いた。「あった」祖父は埃まみれの小さい木箱を押入れから引っ張り出してきた。大きさはサッカーボールほどだろうか、正方形で上蓋が付いているだけだった。

「これだこれ」

取り出した木箱を埃を払い明かりの下に置いた。祖父は少々疲れた顔をしているがにやりと口元を歪めて箱の後ろに座る。

蒼も木箱の前に座った。二人は木箱を中心に対になって座っている。

「で、どうしたの？」

「お前って、幽霊とか信じるタイプだっけ？」

祖父が突拍子もない事を質問してきた。蒼は驚きを隠しつつ、冷静に今の現状を理解しようとした。宗教。

多分怪しい宗教勧誘でも受けて、何か買わされたのかなと推測した。

ただこのままペースに乗せられると一家壊滅になるかもしれない、それはまずい。蒼は使命感を感じつつ反論をする。

「いや、そういう事はあまり信じないようにしているんだけど」

「そうか」

叔父が箱を開ける。中に拳ぐらいの石があった。綺麗に磨かれており、そこらへんで拾ったものではない事は容易に想像できる。

「実はな、話さねばならないことがあつてな」

祖父は石を手に取り続けた。広げられた手の平に石は置かれている。掴んでいるわけではないので突かれたら落ちるだろう。

「この石を見ていてくれ、今からこれを動かす」

そう言うのと耳に届かない程度の絞った声で何かを呟き始めた。

口の動きが止まった瞬間、石が5センチほど手の平から浮かび上がった。

無風であり石に何か付いてる様子ではない。純粹に石が浮かび上がっテイル。

「え、何これえ、何これ、は」「どんなトリック？マジック？」「いやいやこれは」

緒岸は驚きのあまり立ち上がった。動揺し、質問を何度も叩きつけた。

祖父は動じる事なく石を浮かせ続けている。そして淡々と口を開いた。

「驚くのも無理はないか」

手を引っ込めた、石はそのままその空間に固定されてるようだ、ビクともしない。まるでそこに透明な台でもあるかのごとく

自然に置かれていた。